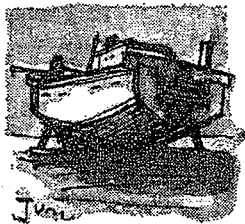


ルポルターージュ・ノート



今 崎 暁 巳

一 ルポルターージュのもつ組織者の役割

私が、ここ数年の間に取り組んだ、労働者の状態とたたかいてのルポルターージュの仕事をふり返って、テーマについて考えてみたい。

「三菱帝国の神話」は、十年近く、日本を代表する独占大企業の差別支配に苦しみ、たたかってきた、長崎三菱造船所の労働者集団を描いた仕事であった。

この仕事の場合、ルポルターージュが、独占企業の集中する造船産業における労使のたたかいの中で、労働者の立場から、資本のやり口を告発し、たたかいを伝え、呼びかける役割をもつ必要のあることは、初めから明らかだった。この仕事が生まれるきっかけとなったのは、たまたかう労働者の産別組織、総評全造船のつくる、映画「あしたの火花」のシナリオ取材からだ。全国の造船現場を取材し、たまたかう青年像を模索しながら、私と橋監督は、次第に、長

崎における、超独占大企業の国家的歴史的規模の労働者支配・人間支配の現実にはきこまれ、そこに、焦点をしばらく、映画がつくられた。

同時に、私の中には、時間に限りのある映画づくりの制約をこえて、職場と労働者の現実を、できる限り、そのまま、人々に伝えたいという欲求が次第に強くなった。あらためて、取材を補強し、一年半に約四〇〇時間の取材を重ねて、四五〇枚の原稿を完成した。

この創作の経緯からみて当然のことだが、取材や映画の撮影段階、そして、映画の上映、本の普及段階で、さまざまな反応や影響が、各地各所、労使双方にあらわれた。

取材に対して、一応門の中に入れても事実上取材拒否する扱いを受けたのに始まり、陰に陽に、資本の側による、この映画と本によってたつ労働者側の思想的たたかいて対する、防衛、反撃の行動があらわれた。映画の上映は長崎市公会堂で行なわれたけれど、会社側労務担当などがはりこみ、三菱社員の入場をチェックする行動が

とられたし、本については、各職場職制が、読まないように指示した事実も報告された。だが、口こみや行動では、誠にきめのこまかい妨害対策がとられているのに、文書など証拠に残るような媒体には、一切なにも語らない作戦をとったことは、さすがに「組織の三菱」の面目躍如というところであった。しかも、これらにたいして会社社内報の類だけでなく、同盟三菱の労組機関紙の類にも、一言半句の反撃もなされなかった事実は、やはり、大企業における労使協調世界の完成度はなみなみならぬものがあることを理解できた。

今思えば、彼等は、あの時期（七四年～七六年）、徹底的に、手を出さない戦術に転じていたように思う。裁判でも、職場でも、地域でも、マスコミでも、三菱の憲法無視の労働者支配があぶり出されないように、必死に口をおさえ、水面下にもぐる作戦をとっていたことは間違いない。

労働者側の攻撃は一定の成果をあげた。

保守頑迷といわれていた、長崎地労委や長崎地裁での職場差別についてのケースは、全部、勝ち進んだし、映画づくりの中では、長崎市公会堂で、有史以来初めてという、「三菱長崎造船所を告発する市民集会」が公然と開かれ、会社側監視の状況下でも、一定の同盟系第二組合員の参加を実現した。職場での差別的ケースは減り、活動家の賃金は正され、仕事を与えられる現象が統発した。

本は、長崎市内の各書店に中里喜昭氏のルポルタージュ「香焼島」とともに、並べて横積みになされ、数ヶ月間、ベストセラーをつづけ、同時に、三菱労働者によって、多くの第二組合員の手に渡されていった。また、本の発売日に、広島の本屋の店頭から本が大量に買われ、買主が三菱重工広島島の労務課であったなど、経営者側の

反応の素早さは、さすがであった。

私はこの本をつくり、読者の手に渡す中で、ルポルタージュの仕事のもつ、重要な役割と機能を身をもって体験することができた。もちろん、それまでも、労働者や無実の刑事被告人のたたかいなど、いくつかの仕事を経験していたけれど、相手の反応について、これほど、はっきりした形でつかむことは不可能だったし、わたし自身の、たたかうルポルタージュについての意識も、それほど、明確になっただけではなかった。

だが、この仕事では、いやでも応でも、ルポルタージュが、階級闘争の火花を散らす職場で果たす任務を、自覚しないわけにはいかなかった。

一つには、相手が高度経済成長の下降期にあたり、大合理化先行中の超独占大企業であったという事実。そして、もう一つは、たたかいの渦中で、たたかう労働者の側に立つて本をつくったという事実。この二つの事実の相乗効果の中から、ルポルタージュの仕事が、現実の中で求められ、果たしていく役割が、実に鮮明に浮かびあがってきたといえるように思う。

要約すれば、たたかう立場に立ち、労働者市民が求めるルポルタージュの仕事は、意識するしないにかかわらず、現実のたたかいにおける組織者の役割を果たすことになるのだ。

そして、組織者の仕事に当然要求される性質として、労働者の生活とたたかいの現状をきちんととらえるとともに、労働者個人および集団の生き方、たたかい方について、一つの方向性をさし示すことになるという点を、特に、指摘しておく必要がある。

つまり、ルポルタージュの特徴が、フィクションの世界と異なり、

「現実から出発し、現実に戻る」点にあるとするならば、労働者のたまたかの現実を描く場合には、当然、そのたまたかの現状報告とともに、将来の方向について先見性をもった仕事が必要されてくるのである。たまたかの渦中で、ルポルターージュの仕事をするということは、そのたまたかの当事者および指導者たちと同質の場合によつては、たまたかのや運動の方向を切り拓く任務さえ背負うということなのだ。すでに、決着がついた場合、すでに歴史の次元になった素材の場合との、違いも、難しさも、この点にあるといつていいのではないか。

日本を代表するオーケストラ音楽家集団・日本フィルハーモニー交響楽団のたまたかのルポルターージュ（「友よ、未来をうたえ」正統）の場合でいえば、まさに、文化を切り捨てる、日本国家および独占大企業の文化政策雇傭政策とたたかうとともに、オーケストラが、日本国民の生活の中に生きつづけ、発展しつづける道を切り拓く目的意識性を、最初から、要求されたのである。

このたまたかいは、労働争議であるとともに、国民の文化づくりの問題でもあるのだから、当然、私自身をふくめて、広く、市民層、日本国民全体の文化分野のたまたかという性格をもっているのだ。だから、私の取材も、首を切ったマスコミ独占資本と音楽家集団の範囲をこえて、彼等の音楽を聴き、オーケストラを支える、全国津浦浦々の生活や運動の中に拡がり、北海道から沖縄までの各地各層の住民と語りあう行動が必要であった。

こうして、私の取材と執筆の重点は、争議から音楽と文化分野におけるたまたかに拡大していったのである。できあがった本は、音楽家自身、地方の聴衆、労働者など、さま

ざまな人々によつて読まれ、新しい組織者・聴衆をつくり出し、音楽活動の拡がりや相互にからみあいながら、人々に読みつかれていつている。

すでに、十万をこす人々によつて読まれ、さらに広い層への拡がりを目指して、映画づくりが実現しようとしている。

まさに、新しいたまたかの場における、組織者の役割を、ルポルターージュが果たしつつある現実がここにもあるのだ。

大切なことは、高度に発達した資本主義国における、労使の生活をかけたたまたかであるとともに、情報化社会の新しい精神支配とのたまたかであるということ。

私たちは、今、テレビやコンピューターを使つての精神支配をふくめた、新しい階級支配と対決する国民の新しいたまたかの方を、明確に、戦略戦術の中に組み入れなければならない時代に来ていることを、自覚する必要があるのだ。

こうした、新しい国家独占資本の支配の現実の中でこそ、多くの働く国民各層が、自由に民主的に、人間らしく生きることを目指すたまたかが日常的に必要となり、このたまたかを反映し、おし進め、多くの人々に愛される表現方法として、ルポルターージュが、極めて重要な役割を果たしつつあるといつていいのではないか。

世界の黒人解放運動、人種差別反対運動の中で、アレックス・ヘイリーの「ルーツ」が数千万の読者をつくり出した事実。日本でも、書き手がその当事者である、「どぶ川学級」（須永茂夫著）が五十万部も売れ、さらに、「教育は死なず」（若林繁太著）がすでに二十五万部近く売れ、さらに拡がりつつある状況を見ると、やはり、人々が現実を知り、現実を改革することを、本音で求めている

時代であることを認識せざるをえないのである。

ルポルターージュは、戦争と革命の中で、生まれ、成長してきたといわれる。

つまり、一つの国、一つの時代の価値が大きく移り変わり、人々が新しい価値を求めて動き始める状況の中で、真実を伝え、新しい道を切り開く真のルポルターージュが、その役割を果たすことは間違いない。その意味で、逆説的にいうならば、全く、反動的保守的な立花隆たち、文藝春秋・ルポ路線を含めて、ルポルターージュ時代が来つつあるという現在の日本は、大いなる変革の時代に入りつつあるということが出来よう。

二 現実を喰いいること

——立場も深く、鮮明に、豊かに

日本では、立場を明確にもつことを避ける傾向が、政治的にも文法的にも強いといってさしつかえない。文学上でも報道の分野でも、思想的立場をもつこと、特に、マルクス主義的思想の場合においては、それだけで、芸術的価値が低くなるようにみたり、「色眼鏡」でみているといったふうな理由で、事実あるいは真実にも遠いというように見る傾向が、まだ、マスコミ界やジャーナリズムの主流となつている。共産党第十五回大会、宮本演説の冒頭に「日本は経済的には高度に発達した資本主義国ですが、反共風土が根づよく、いまだに戦前の防共協定の亡霊がさまよっている」といわざるをえなかつた理由でもあろう。

また、本多勝一氏が「貧困なる精神」第八集の中で、「立場」について質問されたのに答えた文章を読むと、一層、日本の政治的文

化的風土について考えさせられる。本多氏はいう。

「非常に広い意味の立場ということであつて、政党のような次元で、たとえば自民党とか共産党とかそういう意味の立場ではありません。そうではなくて何らかの意味で立場のない立場はないだろうということですよ。これはあたり前のことだろうと思います。だからむしろ反対に立場のない立場というものがあつたという人がいれば、それがどんなものなのか聞いてみたいと思いますね。(中略)そんなようなもので、ルポにしても水俣病をやつた場合に、あの『チッソ』という会社の立場で書く場合と、患者の目で書くのと全く違つたものがでてくる。歴史がみなそうですからね。(中略)別の例でいえば、この今いる喫茶店の中をルポしようとしたとき、書く以上は必ず選択がありますからね。目でみればこの中には無限のものがある。その中から何を選ぶか。もしあなたなら、コップのことから書くかもしれないし、私が選べば、あの鉢植えのナツメヤシ類の植物から書くかもしれない。そこでもう違いがでてきますね。どうしてそういう違いがでてくるかというところ、その人のこれまでの生き方にいろいろな背景があつて、その中から関心がでてくる。それが立場の違いになってきます。(中略)もし『立場』の存在を否定するとしたら、どういふ『立場』から否定するのか、それこそ私は知りたい。あまりにもあたりまえすぎるということだと思ひますね。」

私は、本多氏がいうように、「あたりまえのこと」を、このようにかみ砕いて、周到に説明しなければならぬ必要のある、日本のマスコミ界や本多さんの属する新聞界の「立場」ぬきということでは文章を書かせられない、極めて政治的体質について、考えざるをえない。

一言だけいっておけば、本多氏や斎藤茂男氏がよく指摘する、「主観」や「立場」ぬきの「客観報道」を」というマスコミ報道に要求される基本姿勢が、いかに、すさまじいものであるか、この潮流に抵抗する真実の報道が存在しているにしても、大半の報道やマスコミの主流の仕事から、ほんものの現実には、民衆の立場から鋭く迫るルポルターージュや報道の仕事を期待することは難しいということである。

私は、今、一般にルポルターージュ時代といわれる風潮の中で、現在の高度に発達した資本主義の矛盾をとらえ、その新たな人間支配とたたかい、変革する「立場」を明確にした、ルポルターージュの仕事の必要性を、強調したい。つまり、「立場」にこだわったら、マスコミ界に通用しないとか、極端な場合は、いいルポ（小説でも同じ）が書けないといった、日本のマスコミ界や文筆の世界のタブーにこだわらず、正面から、日本の支配階級の人間支配の新しい戦場をとらえ、日常的に、実践的に、われわれの民主的で階級的なたたかひの「立場」に立った仕事を、積極的につくり出していくことが、極めて重要であると考えなのだ。

その点で、吉野源三郎氏が「同時代のこと」（岩波新書）の中で、ジョン・リードが世界のジャーナリストの誰もまだ、その観点をもちえなかつた時に、一人、ロシアの民衆の中に入り、「ロシア革命が人類史上の最大事件の一つであり、ポリシェヴィキの蹶起が世界的重要性をもつ現象である」という視点で、不滅の革命のルポルターージュを生み出した歴史的事実を、われわれ現代日本人に提示している意味は、極めて大きい。

その中で、当時、眼の前で革命進行中にもペトログラードの小官

僚たちのような、現実の真実の姿を見ることができない、ロシアの国民大衆のことに触れ、現在の日本では、当時のロシアより一層、国民大衆に真実が伝わらず、見えなくなる危険性が大きいことを指摘している点は、重要である。特に、その危険の増大の理由を、テレビなど、情報管理の発達に見ていることは、われわれの、たまたかうルポルターージュの「立場」「あり方」を考える上で、極めて大切な指摘である。

「日本が大きな産業国家となり、大衆社会といわれる今までになかった社会のあり方が私たちの現実となつてからは、上記のような傾向を伴う危険が、かえって五十年前よりも遙かに大きくなつて来ている（中略）このような操作にとつて必要且つ有力な手段は、新聞・雑誌・ラジオ・テレビ、そのいずれも大衆の手中にはなく、大衆は受容するだけで、これを管理することはできない（中略）同時代のことが、今は、私たちの間で、どれだけ正確に眼に映り、どれだけその意味が理解され、どれだけ狂いのない評価を受けているといえるのだろうか。リードのかつて報道したペトログラードの小官僚の——サラリーマンの——妻君たちは、今日の巨大な団地群に、いまでも生きており、いまでは何万倍、何十万倍に増えている」

吉野氏はこの現実をとらえ、描くために、思弁的でなく、実践的にマルクス主義を身につけ、大団に現実に入りこんでいく必要性を、つぎのように、しめくくっている。

「リードが、当時の私などに比べても、マルクスをそれほど読んでいたと思えなかつただけに、この話は、私の心に深く残つたのである。肝要なのは現実であった。現実を明晰な光の中に照し出し、現実を捉え、現実を変えてゆくためにこそ、理論は欠くことができない

いのであった。同時に、理論は、それに耐えるか否かを、絶えず現実によって検証されねばならないのであった。その現実に、リードの眼は喰いこんでいた。私の眼は喰いこんでいるとはいえなかった。」

吉野氏の示す「立場」は、現実を変革する思想的立場のことをさしており、しかも、ルポルタージュをつくる上で、未知の世界に切りこみ、「自己の現実性を知ると共に現実を問題として受取り、それと格闘しつつ環境を変え、その秘密を開き、自分をも変えながら自分を知る」という、歴史上の人間の行動の法則性にのっとり、リードが示した「敢為な凶われぬ精神」の大切さを強調している。

私は、今、吉野氏が強調するように、日本の全く新しい支配の状況に切りこみ、「現実」に喰いこむ、ルポルタージュの方向を確立することが、私たちの緊急の課題だと考える。

事はまさに、吉野氏のいうように、五十年前のロシア革命の時代よりは、遙かに、国民大衆が現実をつかみ、生きていき難くなっている高度に発達した資本主義国日本の現実を、どう喰いこんでとらえるかの問題なのだ。

リードがペトログラドの小官吏に見たような、時代の支配的な思想によつて管理される人間像を、今の日本に見るならば、マンシヨン主婦層の中産階級指向の意識をあげることができるだろうし、また、隣の学友をしめ殺してもエリートを目指したい生徒たち、さらには、大企業と商品による、意識支配の奴隷になっているサラリーマン層、など、この情報化社会と呼ばれる、新しい時代の矛盾に満ちた人間の生きざまを、挙げる事ができる。テレビによつて支配される人間は二官人間、テスト管理教育によつてつくられる子

どもはテスト人間、企業に支配されて生きる人間は管理人間と呼んでいいだろう。私は、この「テレビ」、「教育」、「大企業」という、三つの手段・機構によつて、意識的に進められている、人間精神支配の仕組みを、日本型情報化社会における、人づくりの三種の神器と名づけている。

私が、ここでいいたいことは、相手の人間支配の手法が、複雑かつ巧妙に、意識支配の方向に向かっているのだから、その「現実」をとらえ、変えていくために、私たちは、リードの時代より遙かに、多様で柔軟な対応と行動によつて、支配の「現実」に切りこまなければならぬということなのだ。基本の姿勢は同じである。大事なことは、今の「現実」に、われわれが深く、喰いこむことなのだ。だから、たたかいは場は、まさに、複雑かつ、日常的である。

子どもが家庭内暴力で父を殺す手法を、テレビで知るという「戦場」もあれば、スーパーやデパートの商品売り出しのコマーシャルに、親子ともども大群衆となつてひっかかる「戦場」もある。保育園児が、毎朝六時におきて、アニメを見たり、小学校二年からエリート大学のための塾に通つたり、まさに、現代の精神管理支配によつて生まれる、人間精神荒廃の現象は、限りなく、深く広く、拡がりつつある。

ルポルタージュ「父よ母よ」「子供たちの復讐」など、荒廃の事態と極限状況を告発しており、教育とかかわつた小説「素直な戦士たち」「死にたがる子」なども含めて、すべて、人間の生の原点にかかわる言葉がテーマに使われている。父、母、復讐、戦、死などなど。

子どもたちの世界は、最も純粋に、今の社会の機能が作用し、良

いも悪いも、そっくり子どもたちの人間づくりに反映する。まさに、人間づくりの戦争なのだ。自由で民主的で人間性豊かな人間づくりを目指すか、権威指向で、人を差別することが平気で、自分中心で人を愛せない人間づくりをするか、人間づくりの二つの力が衝突する。われわれ大人の世界の現実の力関係が、このたたかいの未来を決めるのだ。

全国各地の学校が見放した非行少年少女を集めて、教師も生徒もすっ裸になった触れあい教育を行ないつつある、長野県篠井旭高校の教育実践のドキュメント「教育は死なず」が、多くの人びとに読まれ、全国に、教育復興の運動をまきおこす、きっかけとなりつつある。

人間の心の中で、自由と民主主義が生きるか死ぬか、この民族と人間の尊厳がかけられた巨大な人間づくりのたたかいは——だからこそ、私たちは、われわれのたたかう「立場」を深く、豊かに確立し、この現代の支配とたたかい、変革する、新しいルポルタージュの世界を創り出すことが、緊急に必要なのだ。

三 ルポは限りなく「アイデンティティ」を求める

日本では、ルポルタージュ、ドキュメントについての考え方が、まだ、じゅう分に深められ、確立しているとはいえない。ここ十数年ほどの間に、「ベトナム」における戦争と人間を自分の心でとらえたい世界の人々の広範な欲求と願いに応えた、すぐれたルポルタージュ作品群、そして、「冷血」「ルート」など、新しく魅力あるノンフィクション作品の成功、そして、国内的にも、これを受け、文藝春秋など、マスコミ界のノンフィクション重視の傾向、

「あゝ野麦峠」「どぶ川学級」など、働く民衆の立場から真実に迫るノンフィクションが新しい読者層をつくり出しつつある傾向など、さまざまな状況がからみあいながら、今、文学的映像的に、新しいリアリズムの高揚を求める傾向とあいまって、「現実」重視が、あらゆる表現活動の最重要課題になりつつあるといっているだろうか。

こうした状況を反映して、ルポルタージュなど、ノンフィクション分野の表現活動と方法を重視し、追求する傾向がやと強まっていることは確かである。

それにしても、まだ、ルポルタージュ、ドキュメントなどの、ジャンルとしての表現の範囲や可能性について、ひどい偏見や誤解や矮小化がある点に触れておく必要がある。

例えば、人間の内面に深く自由に入ることは、主として、小説の世界であつて、ルポルタージュ、ドキュメントなどの任務ではないと、決めこんでいる傾向がある点である。

現象としてみると、文学、報道の両面から、この見方をつくりあげる傾向が見られる。一つは文学の側からで、ルポとは、小説の構想やテーマの発酵に必要な人間的熟慮を経ないで、簡単に事実の表面を見て書けばいいものだとして、ジャーナリズムや小説家の側で、勝手に、安易に、粗末な見聞記を書いていたことに、大きな原因がある。その点について、フィクション、ノンフィクション両方を手がける堀田善衛の指摘は的を得ている。

「事実を報告するためには、また、その報告がある種の価値をもつためには、いうまでもないことだが、その事実を底の底まで知りぬいていなければならない。(中略)ジャーナリズムが問題のあるところへ出掛けてゆき、短時日の間に調査活動を行い、その上で書き

流すという、お手軽なことでは到底満足できなくなる。(中略) 戦中戦後の日本資本主義の変遷を説くについても、その時期をともに生きてきた私たちが、そこに、なんらかの片鱗によってでもいい、私たち自身の人間的なあり方というものを、深くうなづき、発見できるような風にならなければならないかと思うのである。そんなことは文学小説の役割ではないかという人があるであろうが、そして、それはもちろんそうなのだが、政治経済関係の書きものも、人を感動させる義務を缺いてよいわけではないのである」

ここで、堀田が、ルポルタージュをとらえる上で、「事実」を深くとらえること、そして、人間をとらえることに、置いている点は、現在の問題点を、予見していたということが出来るだろう。

もう一つの原因は、報道記者が書くルポルタージュや記事の中にある、表面的で、人間の中に、深く入ろうとしない傾向である。これは、本多勝一氏がよく指摘するような、「主観ぬきの客観的事実を書け」とか、「立場をもつな」とか、「中立公正を守り、あまり深入りするな」といった、日本のマスコミ報道の主要な傾向が、ルポルタージュに表現の可能性や人間をとらえる深さを失なわせる原因となつていることも間違いない。新聞、テレビマスコミが、迅速性を柱にしているから、一層、この表面的で、事実の深さや、人間の真実をとらえられない安易な報道ルポが後を絶たない理由となつているのだ。

私は、ルポルタージュはルポルタージュ特有の切り口と方法で、人間の内部に、深く入りこみ、フィクションの人間を創造する自由さとは違った、現実の人間のもつ、新鮮で多様な精神の世界を、深く、自由に描き出すことができると考えている。

ルポルタージュが、人間の内面の世界に迫る道筋は、決して、限られて窮屈なものでなく、さまざまな人間への切りこみ方の可能性、その表現方法の多様性があってもいいと考える。一つだけ、いっておく必要のあることは、この人間への切りこみ方の可能性や、表現方法の多様性を生み出す根源は、その人間や事実と接し、相触れあう中で、相手との触れあいの深さ、広さ、そして、とことんまで事実と人間に迫ろうとする意欲、情熱にあるということである。

人間は、他者になりきることができないけれど、人間と人間が触れあうことによつて、一人ではありえなかったことや気分がなかつたことを、見つけたし、創りだすことも事実である。取材の中で、初めて発見するような事実や価値判断があるもので、それは取材する側だけでなく、取材される側にも、ありうることなのだ。当事者なるがゆえに、かえって思い違いしていることや、見方考え方がひどく狂っていることなども、取材の中で、発見し、訂正するような経験もしばしばある。事実が、人間の認識を通して、確認されるのだから、その見方考え方の狂いによつて、正反対の結論や、喜怒哀楽の感情の相違をもたらすことが、しばしばなのである。

「ルーツ」の著者・アレックス・ヘイリーの「マルコムX自伝」は、その意味で、書き手がどこまで、人間の中に入りこみ、その内面描写の可能性をどこまでもつているかを追求する大変面白い仕事であると思う。

ヘイリーは、この仕事を完成させるために、この黒人解放運動の、優れた、魅力ある指導者のすべてを知りつくそうと、限られた取材条件の中で、とことんまで、可能性を追求していった。ヘイリーは、本多勝一氏の質問に応えて語っている。

「たとえば、一週間のうち、三、四晩マルコムが私の家に来て、夜の九時ごろから始めて夜中の一時、三時まで話を続けた。私が質問しながらインタビュして。だいたい一年間で九〇〇時間を共に過ごしたのではないかと思います。その間、彼は自分の人生について思い出せる限りのあらゆるディテールを、私に伝えてくれました。」

この本は、マルコムXの自伝となっていて「これは母から聞いた話だ。母が私をみごもっていたとき……」という書き出しで始まっているが、全く、アレックス・ヘイリーの聞き書きによる、一人称表現で書かれた仕事なのだ。ヘイリー自身、この自伝の終りに、本人とのかわりや、この本の生まれ方について書いており、原稿が仕上がると間もなく、マルコムXが殺害された事によって、一層、ヘイリーが、主人公とともにつくりあげた、この本の魅力と、真実のルポルタージュの仕事の感動的な役割を、確認しないわけにはいかない。

ヘイリーは、この本で、まさに、マルコムX自身になりきっている。ごく、自然に、私はと書き出せる「アイデンティティ」を、主人公に深く迫ることの中で、獲得しきっている。

彼は、このことを可能にする、仕事の量的な積み重ねをきちんと踏んでいる。前述のように、一年間、一日三、四時間、週三、四日の取材を重ね、九〇〇時間のインタビュを行ない、つぎの一年で、大雑把な年代形式をまとめあげ、さらに、一つ一つの章を細かく検討している。その上で、マルコムXを一人称とする伝記を書きあげたのである。

私は、ここに、聞き書きによる、ノンフィクション創造の典型を

みる。とことんまで、マルコムXと交流し、彼の体験がヘイリー自身のものとして語れるほどに、彼の中に入りこんでいるということ。そして、大変に重要なことは、ヘイリーがつぎのように語っている点である。

「これは一つの実験でもあったと思うんです。たとえば、対象となる人物がいる。その人自身かつて踏み込んだことのない深さにまで、こちらがむしろその人を連れていくような……ひとつの対話の形式の中で、その人自身も予想しなかったものを引き出していく。そういうやり方を実験したものだという風にも思っています」（傍点筆者）

会話の形式の中で、対象者および関係ある人々の過去について、記憶をたどり再現する中で、「その人自身も予想しなかったものを引き出していく」作業をするというのである。この方法を徹底的に追求するならば、取材者が現場に居合わせなくても、少なくとも、資料と当時の関係を丁寧に追えば、その条件のある場合には、非常に広い範囲で事実を掘り起こし、再現することが可能といえるのだ。

事件と事実と人間関係をこのような形で、深く豊かに、再現確認する中で、第三者である取材者が、その当事者と交わらない現状認識とアイデンティティをもつことになるということ——それから先、その材料をどのように生かして、どのようなノンフィクション作品に仕上げるかについては、結論だけをいっておくならば、相当広い可能性をもっているのが、現代のルポルタージュ、ドキュメント、ノンフィクションの世界といっているように思う。かつては、小説のものと考えられていた、筋、構成、人物キャラクターなど、すべて、新しいルポルタージュの必要条件といっているのだから。